

「生活支援・社会参加」型の

生活保護自立支援プログラム担当職員の役割と専門性

添田 祥史

【要約】

関係者の中で、釧路市を嚆矢とする「社会生活自立」と「日常生活自立」の回復を基盤にすえた長期的な「就労自立」を支援する取り組みに注目が集まっている。本稿では、こうした「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムは、これまでの生活保護行政の援助実践と視座と方法が異なり、その運用に直接的に関わる現場職員には新たな役割と専門性が求められている。本稿では、釧路市とそれをモデルとする大牟田市における支援実践の実状から、その抽出を試みた。

その結果、①人間の尊厳に対する確かな感性と人間の可能性への信頼、②参加者の警戒感や不安を取り除くヒューマン・スキル、③自らの経験から相手の立場を推量する「成り込む」力、④労働の喜びややりがいを可視化させる力、⑤行きつ戻りつすることを許容する発達観と「待つ」ことへの耐性、⑥未踏の事業を開拓することを楽しむパイオニア精神と創造性、⑦他者と協働関係を築くための時間と労力を惜しまない姿勢、⑧マッチング作業における当事者性と「翻訳力」、⑨アセスメント能力とクールな状況判断、の8つの共通点が確認できた。

1 問題の所在

生活保護行政の現場には、最低生活保障のみならず、生活困窮者の自立・就労のエンパワーメントという役割が新たに強調されるようになった。すなわち、「被保護世帯が安定した生活を再建し、地域社会への参加や労働市場への「再挑戦」を可能とするための「バネ」としての働きをもたせることが特に重要であるという視点である」（厚生労働省『生活保護制度の在り方に関する専門委員会報

告書』2004年12月）。そのため同報告書は、「就労による経済的自立のための支援（就労自立支援）のみならず、それぞれの被保護者の能力やその抱える問題に応じ、身体や精神の健康を回復・維持し、自分で自分の健康・生活管理を行うなど日常生活において自立した生活を送るための支援（日常生活自立支援）や、社会的なつながりを回復・維持するなど社会生活における自立の支援（社会生活自立支援）を含む」自立観が示された。

しかし、生活保護の現場では、被保護者の

生活面においては、不正受給の防止や金銭管理といったチェック・監視的な役割が主であり、受給者をエンパワーメントすると発想とは無縁であったとえる。厚生労働省がモデルとして示したハローワーク連携型のプログラムも就労自立支援の視座にたつものであり、社会生活自立、日常生活自立に関連したプログラム実施は極端に少ない状況にある。

そうした現状にあって、関係者の間で、釧路市を嚆矢とする社会生活自立と日常生活自立の回復を基盤にすえた長期的な就労自立を支援する取り組みに注目が集まっている（以下、「生活支援・社会参加型」自立支援プログラムと呼ぶ）。

こうした「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムは、これまでの生活保護行政の援助実践と視座と方法が異なり、その運用に直接的に関わる現場職員には新たな専門性が求められている。「生活支援・社会参加型」のプログラムは、その関心の高さとは裏腹に普及のスピードは遅い。

「生活支援・社会参加」型のプログラムは、地域のNPOや民間企業と協力して、被保護者がボランティアとして「働く」場を作り出さねばならず、そのために時間がかかっていることも予想されるが、最大の原因は、地域の諸資源をネットワーク化し、社会的居場所における人の回復を支援する役職を誰が担うのかに二の足を踏んでいることにあるのではないか。すなわち、「生活支援・社会参加型」のプログラム担当者がどのような専門性をもった人材を配置するかに関する情報の不足が、問題になっていると筆者は考える。

以上の問題関心から、本稿では、釧路市とそれをモデルとする大牟田市における支援実践の実状から、その抽出を試みる。

2 方法

2-1 役割と専門性の抽出方法

本稿では、自立支援プログラムの直接的な企画・立案・実施に関わる現場職員2名の実践から、求められる役割と専門性について考えてみたい。一人は、「生活支援・社会参加」型のパイオニアである釧路市において、自立支援プログラム草創期に自立生活支援員を務めていた黒田さんである。彼女に対する周囲の評価は極めて高い。もう一人は、釧路をモデルに同種の活動をする大牟田市の自立支援相談員の太田さんである。

分析方法は次のとおりである。まず、全文テープおこししたトランスクリプトを通読した。関わりのありそうだと思う箇所全てに線や印をつけていった。次に、そうした線や印を比較検討し、関連するものにあてはまるカテゴリーを探していった。第一段階では、5つのカテゴリーが生まれた。

その後、もう一度、印や線を増やししながら精読した結果、カテゴリーは8つに増えた。さらに、線や印と生成したカテゴリー間を比較検討し、自分が納得できるまでカテゴリー名を精査していった。

2-2 分析上の補足参考データ（これまで行ってきた調査研究、関わり等）

■本科研での調査活動

- ①釧路市生活保護受給者の生活実態調査（昨年度報告書添付）
- ②釧路市自立支援プログラム参加者への個別聞き取り調査（添田 2010）
- ③大牟田市自立支援プログラム受け入れ機関への訪問調査

■釧路市生活保護自立支援プログラム

第二次ワーキング・グループとしての調査

- ①プログラム参加者へのグループ面談
- ②プログラム辞退者への聞き取り
- ③ケースワーカーへのグループ面談
- ④受け入れ機関訪問調査

■釧路市福祉部生活福祉事務所編集委員会

(2009) に掲載の黒田さんの実践記録

2-3 主たるデータとなる面接調査

【面接調査1】釧路市自立生活支援員

■日時と方法

協力者：黒田さん（女性・40代半ば）

日時：2010年7月

会場：北海道教育大学釧路校

方法：添田が主として質問役、中園が適宜補足説明を求める。学生2名傍聴。半構造化インタビューで約2時間。

事前に用意した質問の柱：

①プロフィール

- ・経歴、職歴、応募動機、自立生活指導員として働きはじめたこと

②就業体験的ボランティア事業における自立過程

- ・印象的なエピソード、就労にいたった例、就労を左右するもの

③自立生活支援員の専門性

- ・支援をする上で心がけたこと
- ・黒田さんが考える専門性とは
- ・その獲得にはどんなことが必要か

④就業体験的ボランティア事業の今後

- ・黒田さんからみた本事業の可能性
- ・黒田さんからみた本事業の限界
- ・どのような評価軸が有効か

■黒田さんの略歴

黒田さん（仮名・女性・40代前半）は、2005年春、釧路市の自立プログラムの草創期から5年間、自立生活指導員を務めた。聞き取り時は、雇用期限が終わり、別の仕事に就いていた。語れる範囲でお願いしたところ、次のように経歴を話してくれた。

家庭の経済状況もあり、日中経理事務として働きながら関東にある大学の商学部二部を卒業した。就職後に、いくつかボランティア活動に参加したという。釧路に戻ってきて、しばらくして結婚。夫が転勤族だったので道内を転々とした。

離婚後、3名の子どもを引き取り、10年ぶりに職を得るためには資格が必要だと考え、専門学校に自費で通った。さらに、働きながら4年生の通信制大学で教員免許を取得後、学習塾のアルバイト講師で、高校の時間講師などの仕事をかけもちした生活を送る。塾が社員契約になるもその分仕事が忙しくなり、「親としてはまずい」と考え、生活は不安であったが、育児に専念することした。失業保険が切れた後、職業訓練に半年間通い、ハローワークで求職経験をした。

2005年3月、職業訓練も終盤に近づいた頃、「絶対ここが受かりたい」という就職試験に二次試験で落とされた。子どもの仕送りが目前に迫り、焦っていたときに、福祉事務所の求人票を発見した。高齢者の生活支援関連の求人に応募し面接試験を受けた。後日、自立生活支援員の方の面接を受けないかと誘いの電話があり、採用されるに至る。以前勤めていた学習塾にアルバイトとして雇用してもらい、ダブルワークで生計を維持することにした。調査時も、同様の生活であった。

【面接調査 2】大牟田市自立支援相談員

佐藤さん（仮名・女性・20代半ば）

■日時と方法

協力者：太田さん（女性・20代半ば）

日時：2010年12月

会場：大牟田市生活保護課

方法：聞き取りは添田が実施。半構造化インタビューで約1時間。

事前に用意した質問の柱：

①プロフィール

- ・経歴、職歴、応募動機、自立生活指導員として働きはじめたこと

②就業体験的ボランティア事業における自立過程

- ・印象的なエピソード、就労にいたった例、就労を左右するもの

③自立生活支援員の専門性

- ・支援をする上で心がけたこと
- ・佐藤さんが考える専門性とは
- ・その獲得にはどんなことが必要か

④就業体験的ボランティア事業の今後

- ・佐藤さんからみた本事業の可能性
- ・佐藤さんからみた本事業の限界
- ・どのような評価軸が有効か

なお、太田さんのインタビューの前に、プログラム参加者の聞き取り調査を行っており、それに関連した補足質問に時間を行った。その関係で詳しく聞けなかった項目もある。

■太田さんの略歴

太田さんは（仮名・女性・20代前半）、2008年から大牟田市の就業体験的ボランティア事業の立ち上げに伴い雇用され、プログラム

の企画・立案・実施を担当している。

専門学校で社会福祉を学んだ後、大学文学部に編入学した。卒業後、市内の病院で社会福祉士として勤務していた。精神保健福祉士資格をとりたかったが、その病院には精神科がなく、本格的な精神障害をもった方とのふれあいなしに資格を取ることに抵抗があったという。「このままじゃまずいな」と思っていた頃、同じ職場の先輩から大牟田市が自立支援プログラムのお話を聞き、応募した。

もともと福祉関係の仕事に強い関心があったわけではなかったという。きっかけは、高校3年生の時の受験に「失敗」したことだった。志望大学に「落ちると思ってなくて、滑り止めを受けてなかったんで、あせって受けたのが専門学校」だった。思い描いていた進路から大きく変更になった専門学校を当初はやめようと思っていたが、結局、社会福祉士の任用資格をとり卒業した。その後、大学の編入試験を「受けたら、受かっちゃって、なんだかなと思って」生きてきた。

「福祉の方にめざめたのがここだったような気がします」という。大学受験に失敗したことを引きずり「転落した気分」になっていたが、自立支援プログラムに関わることで、気持ちに変化が表れた。保護受給者と接する中で、「絶望って言うのを味わったことがある方ばかり」だったので、「自分があますぎたな」と思うようになった。

当初は、他に苦しんでいるひとがいっぱいいる中で「どうして生活保護だけ」という思いもなくはなかったが、一人一人と話をするなかで、「生活保護の世帯がもつ生きづらさというのが見えてきた」。そうすると、「ただボランティアをさせて、がんばってねっている人間」に留まるわけにはいかなくな

った。事業をどうにか利用して、「自己実現」を援助したいと思うようになったという。

筆者の太田さんの印象は、努力家で仕事への責任感が強く、聡明な方だというものだった。また、同僚や生活保護受給者との接し方から、正直、社会人になって数年しかたっていないと聞いたときは驚いた。

現在、ひきこもりや不登校経験者の学習支援のボランティア活動にも参加している。

3 結果

分析の結果、ふたりの実践から次の九つのカテゴリが生成された。

一つ目は、人間の尊厳に対する確かな感性と人間の可能性への信頼である。

二つ目は、参加者の警戒感や不安を取り除くヒューマン・スキルである。傷つき体験をしてきた人たちの心情を察しながら、共感的に関わり、対話を生み出す力が必要である。

三つ目は、自らの経験から相手の立場を推量する「成り込む」力である。「成り込む」とは、心理学者の鯨岡峻によって提示された概念で、他者の情動を間主観的に理解する、感じることを意味する。その出発点は、自分の経験である。一般論として判断するのではなく、自分が相手の立場だったらどうなのかという意識をもつことで、当事者性が生まれている。

四つ目は、「働く」ことの喜びややりがいを見えさせる力である。「生活支援・社会参加」型のプログラムは、参加者にとっても、担当ワーカーにとっても成果が見えにくい。そこで自立生活支援員などの担当者は、労いや感謝などの声かけなどを通じて、活動に興味づけを行いやりがいを創出していた。また、

笑顔が増えた、表情が明るくなったなどの微細な変化をワーカーに伝えていた。

五つ目は、行きつ戻りつすることを許容する発達観と「待つ」ことへの耐性である。直線的な発達観ではなく、時に期待を裏切られても信じて関わり続ける忍耐が必要となる。

六つ目は、未踏の事業を開拓することを楽しむパイオニア精神と創造性である。

七つ目は、他者と協働関係を築くための時間と労力を惜しまない姿勢である。「生活支援・社会参加」型のプログラム開発には、NPOや企業の協力なしには成り立たない。

八つ目は、プログラムのマッチング作業における当事者性と「翻訳力」である。ここでいう当事者性とは、当事者側の立場や思いに沿った判断である。「もし私が彼・彼女の立場だったらどうだろう」という問いを絶えず繰り返しながら受給者と向き合うことある。

「翻訳力」とは、一つには、そうした受給者の声にならない声を言葉として聴き取る力をさす。人は誰かと話すことで、自分が何者であるか、何がしたいかを同時に形づくっていく。語ることが現実をつくる。アセスメントの重要なデータとなるのが、受給者の語りである。語りが生まれやすい雰囲気づくり、途切れかちな言葉を補足すること、そうした「聴く耳」や姿勢をもつことを意味する。もう一つには、受給者の生活者としてのニーズや困り感を自立支援プログラムのみならず、既存の施策や制度を最大限の読み幅で解釈しながらすり合わせていく力をさす。

九つ目は、アセスメント能力とクールな状況判断である。受給者に対して、共感的かつ受容的に接しつつも、現在の能力や特性を的確に査定し、冷静な判断のもとで受給者に接していくことが求められる。

3-1 人間の尊厳に対する確かな感性 と人間の可能性への信頼

【黒田さん】

近所に生活保護で暮らしている独居老人がいた。家庭菜園で採れたを差し入れたりする程度の関係であったが、その方が突然亡くなられたと聞いて、「すごいショック」だった。何か自分があの時声をかけていれば良かったかなとかね、そういう思いも挽回できるかなって。

別にその専門性は必要ないと思います。けど要は人を大事に思えるかどうかだけかな。あとは自分とその人の立場は結局同じというか、助ける人、助けられる人じゃなくて同じ立場かなってところが抜けてなければいいのかな。

最終的に別に保護なんか受けたくなかったけど、受けざるを得ない状況になったっていうことになる、ある種心に傷があるっていうか、そういうものがあるからその部分は労わってあげるって言うのはおかしいけど、大事にしてあげないと。いつまでも上下関係で上から物言いだったりとか、ダメな奴だっと思われたりとか、それってどうって。自分だっって頑張りたいのに萎えてくるじゃないですか、気持ち。けど自分はこんなことが出来るよ、あんなことが出来るよって実際やってみて分かったときに、「あ、自分って出来るじゃん」って。外に行くのも怖くないねって。引きこもりしていたとしても、怖くないんだね、人の役に立っているんだって思うと嬉しいし、やっぱり最終的には人と人と

のつながりがないと人間ってダメかなって。その中で人から認められたり、自分自身で自分を認めたりとかがないと、やっぱり元気でやっていけないって、そういうのを感じたりして。

そこ（＝生活保護）から出ていくのは怖いじゃないですか。病院代も自分で払わなくちゃならなくなるわけだし。何があるかわからない訳。うるさいことは言われたくないけど、きっと怖いと思うんです。

【太田さん】

諦めっていうのがやはり、ずっと不採用不採用と重ねられると、自分が本当に使えない人間じゃないかって評価が格段に下がっていく。自分は何でもやれるっていう気力をもっていたとしてもですよ。だからその回復をどう図っていくかってことですよ。

3-2 参加者の警戒感や不安を取り除く ヒューマン・スキルと配慮

【太田さん】

電話で引かないようにって言うか、この人いるんだったら大丈夫だっと思ってもらえるように大事に。（略）あと、時間とか地図とかわからないようだったら送りますよってセットにして。あと、バスの時間とかわかりますか？何線にいつも乗ってますか？（略）着いた頃にわからなかったら電話もう一回くださいねとか。

（受け入れ機関には）ただ説明会のとき行くだけじゃくて、何回か三ヶ月に1回とか二ヶ月に1回とかとにかく全部ぐるぐる回る。あ

る程度慣れた頃にもう一回回って、一緒に（作業を）やりながら「どう？」なんて話したりとか、みんなの様子、何か困っていることないかなとか。（略）私、ケースワーカーと違ってお金預かっている、あなたにお金渡しますっていう立場じゃないので、勿論上下関係ない、上下関係ってそういう関係で言ったらおかしいけど、そういう繋がりが全くないので、一緒に時々ボランティアやる人ってそういう感覚なので、あとはちょっと心配してくれる人って、何か要望あれば聞いてくれる人って感覚だと思うので、その編は冗談も言ってきてくれたり、（略）要望があればふつうに言ってもらえる関係を作るといふか、まあそんな感じですね。

初めてのものっていうのは、誰でも怖いんですよ。本当に福祉事務所でボランティアって何これみたいな。何か怪しい者ではありません。そういうのが伝わらないと出てきてもらえないので、「怖くないよー大丈夫」って楽しんでやるぐらいで「絶対やれ！」じゃない。そういう部分は（参加者に）わかってほしいから。

同じ釜の飯を食うじゃないけど、そういうこと（＝受け入れ機関を訪問し、一緒に作業すること）をしないと人ってひらかれないじゃないですかね。私は怖くない人ですって言ったらおかしいけど同じ、だってたまたま今回自立支援で採用になったけど、これがなければ同じ立場、逆転してるかもしれないわけですから。私も母子家庭ですしね。だと思ふので、なるべく役に立ちたいっていうのもおこがましいですけど、役にもたちたいし、そういう感じですかね。

【太田さん】

本人さんも不安だと思うんですよ。いきなり来た人が、（面接用紙の）こちらへんに聞いてもない情報を書いてるっていうのを見たら。「なんだこいつ」って思うかなって。それで不信感をもたれても嫌なので、そこはまっさらな気持ちでいた方が、私はプラスだろうし、相手の気持ちもよく聞ける。真っ白なのが、真黒く埋まっていくと（＝何も書かれていなかった面接用紙がやりとりしていく中で項目が埋まっていくこと）本人さんも自分の言っていることが伝わっていると思ってくれてるのかなって。

キャラ的にもともと暗いわけじゃないですからね。ただ努めて明るくしようとしているわけじゃないし。とりあえず、この人と話してよかったとか、苦ではないっていう状況を作らないと、本人たちも話しにくいじゃないですか。

3-3 参加者のニーズのマッチング作業 における当事者性と「翻訳力」

【黒田さん】

手順は次のようである。電話をする前に、担当ワーカーからなるべく情報を引き出す。そして、次のように声をかけるという。腰痛でねって言ったら、例えば本人が草刈りをやりたいって言っても、「あ、腰痛なのか」って解るからもう一回お電話したとき、「何々さんお手紙いただいてありがとうございます。草刈ってことですけども、体調的には大丈夫ですか？」「いや腰痛なんだよ」って向こうがおっしゃれば、「じゃあ座って

するのがありますよー。こんなものありますよー」「じゃあ座るのがいいかな」「じゃあ、それやってみましょうか。まず説明会するので、私玄関で待ってますから」

【太田さん】

基本的にみなさんの考えを大事にしていますよ。ただ、修正というのにはちがうんですけど、本人に意欲をもってもらうためためには働きかけとか促しというのがあるんですよ。面接しながら、それはたとえば「どうして？」っていう促しがあってこそ本人の回答があるじゃないですか。その回答がないままに支援はできないのかなって。とにかく本人とじっくり話をすることとは思っています。あとは、本人さんの性格を分析すること。やはり面接するだけじゃわからないというものもあるからですね。そこはお話しして、ある程度自分なりになんですけど、こういう人にはこういった考えの持ち主なんだろうなって、それを確実なものにしていってアプローチするようにしています。

3-4 自らの経験から相手の状況を 推量する「成り込む」力

【黒田さん】

知り合いもいないような所だったので結構心細いかなということはありませんけど。

その10年くらいブランクがあっただけでなくなったおきパソコンの時代がきていたんですよ。

「絶対ここに受かりたい。私がまっているのはここだろうってところがあった」。生活費

も十分何とかかなるところで、一次選抜を合格し、二次の面接では「どうしてもなんかこう話しているのに空回りみたいな」。「残念でしたってときは、もう泣きましたね。もう訓練も本当に終わりの方で、3月に押し押し迫っていて、(略) 4月からは仕送りがあるでしょうってなんとかしないって

「あんた面白い人だな。そんなの持ってくるひといないよ」ということになって。ただ子どもが小さいから結構不規則な時間帯にもなる仕事だから今回はちょっと難しいねってことでそこはお断りしたんですけど。

自分が失業していたときとかもあるし、何回応募しても落ちるとかね。多分同じ気持ちだったと思うんですよ、参加している皆さんもね。何回行っても「仕事行け」って言うけど応募できるものがない訳ですよ。皆さん無かったりとか、落ちちゃったりとかね。何回も挫折を味わって、最後は泣きですよ。「何で受かんないの」って。泣きになるわけですよ、自分もあるしね。あとね、自分が昔から結構「人から言われたくない」って。人から押し付けられるの嫌じゃないですか。(略) 自分自身がそうだから、やっぱりありがとって言われて嬉しくない人はいないし、何回も何回も挫折があっただけで、最終的に別に保護なんか受けたくなかったけど、受けざるを得ない状況になったってということになると、ある種心に傷があるっていうか、そういうものがあるからその部分は労ってあげないと。

【太田さん】

自分が失敗した挫折の経験があるから転落した気分になっていたんですけど、こちらに

きたらですね、みなさん私なんかよりも暗い
というか絶望っていうのを味わったこと
のある方ばかり。「ちょっとこれはいかな。
自分が甘すぎたな」って。はじめは事業に関
して「どうして生活保護だけ。他に苦しんで
いる人いっぱいいるのに」って。現実みなさ
ん個人個人とお話しをすると苦しみを抱え
てあったりとか、生活保護の世帯がもつ生き
づらさというのが見えてきたんです。そうな
ってしまったら、ちょっと事業をどうにか利
用して利用者さんたちの自己実現とか、本来
あるべきところに目を向けさせないといけ
ないのかなって思ってきたんです。そこがな
ければ、ただボランティアをさせて、「がんば
ってるね」って言っている人間だと思
います。福祉の方に目覚めたのがここだった
ような気がします。

3-5 行きつ戻りつすることを許容する 発達観と「待つ」ことへの耐性

【黒田さん】

ある女性は一人暮らしでヘルパーやっていた
んですけど、たった独りぼっちで腰を悪くし、
無職で家にいてもテレビで悲しい曲が流れ
ると涙が出てくるんですって。(担当のケー
スワーカー)もこれは今違うでしょうって
いうことで、私を呼んでちょっと話して「や
一人でいても気晴れないから、ちょっと週1
回くらいボランティア行かない」って話をし
たり。だから行きつ戻りつ。それでもやっぱ
り(他者や社会と)繋がりがあがる(ことが大
事)という感じ。

この人また来ちゃうかもっていうのは、ある
人にはあると思います。でもある程度こう段

階を踏んでいっている人には、ちゃんとステ
ップアップしてねっていう思いはあってや
っていると思います。(略)無理のないとこ
ろから自分でやってみるっていう。

【太田さん】

底着き体験ってあると思うんですよね。一回
ですね、転落してとまるじゃないですか、自
分の中で。「あたしダメだ、あたしダメだ」
って悲観的な思いになっていると、もうあと
は這い上がるしかないんですよね。底に着い
ちやえば留まっているか上に行くしかない
んですよね。

あっち(受け入れ機関)から来ないかって言
われたんですけど、本人は断ることはないか
なって。「働きたい働きたい」って言ってい
るから。ただ毎日30分の通勤、自転車通勤
ですから、がんばれば私はいけるんじゃない
だろうかって思ってたんですけど。本人さん
は断って。あーって思ったんですよね。朝の
30分はがんばれないのかなーって。多少自
分に甘いところ、それぞれあるから、難しい
ですよ。

3-6 未踏の事業を開拓することを 楽しむパイオニア精神と気概

【黒田さん】

久しぶりに仕事もするし、たまたま面白そう
だなって仕事があってそこに面接にいきま
したら、自分でこんなことしたらいいな、あ
んなことしたらいいよなっていう仕事で事
務とかの仕事じゃなくて、何か作っていく感
じで。面接のときに提案しちゃったわけです
よ。こんなのどうですか、みたいなことで。

私、前の広告屋（の仕事）でもそうじゃないですか、新たにつくっていかなきゃならないんですね、人のニーズにあわせてとか、動きにあわせてとか、興味にあわせてとか作っていくことが嫌いじゃないんですよね。そういうものが好きというか。じゃあ自分んに何が求められているか、福祉系卒業していないから、じゃあ何が求められているのかなってことも知りたかったし、（他の自治体の取り組みや先行実践などの）「何か読むものをください」って読むものもらって読んで、自分なりに考えて「こういうことかな」っていうのがあったので、パソコンをたまたまいただいたので書いたりして。

当時は、ケースワーカーと保護受給者双方に、自立支援について理解してもらう必要があった。今では全国的に注目を集めている釧路市でも、「同好会」として一部のもの好きがやっていることという風潮だったという。そうした風当りは、鈴木さんにも向けられた。「こんな人雇ってどうするんだろうね」と言われたこともあるという。

内心ね、「こんな人って私の何をしているんです」みたいな。「こんな人」って言われないよう頑張るしかないなあって言うのがありまして。

【黒田さん】

- ・訪問調査の移動中の車内で、「自由にまかせてくれるからやりやすい」と述べていた。
- ・「研究」「分析」ということばをインタビュー中に多用していた。

3-7 他者との協働関係をつくる

手間と暇を惜しまない姿勢

【黒田さん】

上から物言いとかやってよ、とかじゃなくて、何気にしっとり、じんわりと入って気づいたらいたみたいなの、そういうのがいいな—なんて思って、「私はいます」と言うのをじんわりじんわり、こうね（笑）。だからはじめのうちは、まずたくさんの方がいるから名前覚えたり、似顔絵描いて名前を覚えたり。

事業所（＝受け入れ機関）の人ともしょっちゅう出入りするような感じにしている。事業所ともいい関係を作っておかないと「この人はこういう方だからおろしくお願いします」とか事業者さんも「この人のことで困っているんだよね」ってきたら、その辺をよしなにしたりとかですね。そこしか行くところがないので、あるとしたらそこに自分で行くしかない。

【太田さん】

介護施設は頻繁に行くとか邪魔になるのであまり行けないけど、大体3週間、1ヶ月くらいですね。ほかの用事で行ったときに「どうですか」ってことくらい。

3-8 「就労」への間口を広げ、

「報酬」を可視化させる力

【黒田さん】

上から目線で物言って「あんた、これ整っていないからやりなさい」って言われるとやり

たくなるじゃないですか。そうじゃなくて、「当てにしています。よろしくね」とか「やってもらって嬉しいよ」とか「ありがとう」とか言われると「やってやってもいいかな」とか「ちょっとやりがいあるかな」とか「自分のことわかってくれているんだ」とかそういう部分があると自然にやってみようかなって言ううちに（生活）リズムが整っていく。だから、何かの目的のためだったら人は頑張れるじゃないですか。その部分ではこの部分はすごく良かったのかな、なんて思うことで（頑張れる）。

そうした成果の可視化は担当ワーカーにも伝えられる。多くのワーカーたちは、成果を実感しにくいなかで仕事にやりがいを見いだせずにいるという。そうした状況にあって、鈴木さんのことばは日々の仕事に確かな手応えをくれる。

（担当ワーカーは）今までの経歴のその人しか知らないから「あーこうなってたんだ。続いているだ」って感じて、見る目がちょっと変わってくるっていうかね。それとか「すごく楽しいんだよ」なんて話される方だと「あー楽しいんだ。行って良かったね」てことになってくるので見え方も変わってくる。「なかなか仕事探ししないし、この人は」って思ったり、「パチンコ屋ばかり行ってこの人は」なんて仮に思ってた人が「あーそっか。ひとのために一生懸命やってるんだ。あー行くところなかったからしょうがなくパチンコ屋ばかり行ってたんだ」とかね、そういう目が変わってくるんですね。（略）いろんな角度から見ると繋がりとかがあるから、その人について立体的になるって言うか。

【太田さん】

（調査時に動物園で筆者が見たように）あんなにざっくばらんに話しているわけじゃないですよ。一回行ったら全員に話かけるということを自分の中に決めているんですね。全員に声をかけて、体調を聞いたりとか、そういうのを確実に行うようにしています。誰誰に話して誰誰に話さないっていうのは不公平を感じますからね。

3-9 アセスメント能力と

クールな状況分析

【黒田さん】

車持っていないからそんなとこいけないって言ったりね。でもね、やる気さえあれば歩いてだっていけるです。こんな厳しいこと言ったらどうよって思うんですけど。ちょっと早く起きて歩いてだって、自転車ですって行く人はいくし。（略）車がないと出来ないんだって思い込みが人を縛ってしまうというか。

お金大事ですよ、大事ですけど、ただお金をくればいいじゃどうにもこうにもなんない。訓練も大事なんだけど、資格取れば少しは広がりますよ、でもパソコン資格とか医療事務資格取ったからってそれだけで就職できるところがあるかっという。特に医療事務なんてほとんどないですよ。しかも出てくる求人は経験者のみ。

上から物言いとかやってよ、とかじゃなくて、何気にしっとり、じんわりと入って気づいたらいたみたいなの、そういうのがいいなーなんて思って、「私はいます」と言うのをじんわ

りじんわり、こうね（笑）。だからはじめのうち、まずたくさんの方がいるから名前覚えたり、似顔絵描いて名前を覚えたり。

かなり前にホテル業されていた方で、けど全く歯がなかったんですよ。（略）保護でもなんでも活用して歯を入れてしまってそれから探されたほうが可能性は高いと。十分に国で保障されているものだから申請が上手く通れば、ちゃんとそこをきちんとしてから応募した方が彼にとっていいんじゃないかなって。いや歯がないなんて言うのも失礼かと思ったんだけど本当にその人のためを思ったら言わさったって。（略）活用できるものは活用したらいいと思います。

【太田さん】

介護の方に関しては、患者さんを傷つけるリスクもありますし、障害者の方に関しては不適切な発言を控えていただかなければならないので。

動物園に関しては、そうですね、チームの色があるからですね。Mさんたちのチームは仲が良くて、話しながらやってくれるところなんで気軽に「元気してるとねー」って入っていくんですよ。で、あっちも私が来たら手を振ってくれるような感じているんですよ。ただ、他のチームでは一歩引いたり、おとなしいチームもいるからその時は「大丈夫ですか」って丁寧な感じで。その色によって使い分けて。

おわりに

本稿は、「生活支援・社会参加」型の生活保護自立支援プログラム担当職員に求められる専門性と役割について、実際の職員の職務実態から抽出することを試みた。結果として示された9つの項目は、ある程度一般性をもつものと思われるが、今後、現場と協議しながら検証されていく必要がある。

また、担当職員の専門性は、プログラムの成熟度によって変わることが予想される。その意味で、今回明らかになったことは、草創期に求められるものといえる。

最後に、本稿は、一次分析レベルにとどまった感は否めない。役割と専門性との関係を構造的に示す必要がある。今後の検討課題としたい。

引用・参考文献

- 釧路市福祉部生活福祉事務所編集委員会編
2009『希望をもって生きる—生活保護の常識をくつがえす釧路チャレンジ』CLC
鯨岡峻 2006 『ひとがひとをわかるということ』ミネルヴァ書房
添田祥史 2010 「生活保護受給者の生活現実と自立支援プログラム」『釧路論集』第42号

「生活支援・社会参加」型自立支援プログラム参加者

の聞き取り調査報告（大牟田市）

添田 祥史

【要約】

本稿は、大牟田市における「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラム参加者の聞き取り調査の一次分析結果報告である。同市では、釧路市の取り組みを参考に、「社会生活自立」と「日常生活自立」の回復を基盤にすえた長期的な「就労自立」を支援する取り組みを行っている。①生い立ち、②生活保護を受給するまでの経緯、③現在の生活、④プログラムに参加して、⑤プログラムの改善点・要望の5点を柱に半構造化インタビューを実施した。その結果、生きがいや生活リズムの完全、社会関係の回復等がみられる一方、強く就労自立を希望する者に対しては、「出口」や「目標」をいかに用意するかという釧路市同様の課題に直面していることが明らかになった。

1 問題の所在

本稿は、大牟田市における「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラム参加者の聞き取り調査の一次分析結果報告である。同市では、釧路市の取り組みを参考に、「社会生活自立」と「日常生活自立」の回復を基盤にすえた長期的な「就労自立」を支援する取り組みを行っている。

生活保護行政の現場には、「被保護世帯が安定した生活を再建し、地域社会への参加や労働市場への「再挑戦」を可能とするための「バネ」としての働きをもたせることが特に重要であるという視点である」（厚生労働省『生活保護制度の在り方に関する専門委員

会報告書』2004年12月）。同報告書では、「就労による経済的自立のための支援（就労自立支援）のみならず、それぞれの被保護者の能力やその抱える問題に応じ、身体や精神立を支援する取り組みに注目が集まっている（以下、「生活支援・社会参加型」自立支援プログラムと呼ぶ）。

こうした「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムは、釧路市を嚆矢として今後全国に波及していくと思われるが、その成果と評価のためにも当事者である参加者の声を個別具体的に聞き取っていく作業が不可欠となる。

大牟田市は、釧路市の取り組みを参照し、「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムを実施している。

2 方法

調査の趣旨を説明し、「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムの担当者何名か参加者本人から話を伺いたいと相談したところ、次の3名の参加者を紹介してくれた。選定した際に基準や理由があるかを尋ねたところ、異なるタイプの参加者からのインタビューを行った方が有意義な調査になるとの配慮から、各々は次のような特徴として選定したという。

Mさん(60代前半・女性)は、強い就労意欲をもちつつも年齢的に就労が難しいなかで、プログラム参加によって、「生きがいとしての気づきがあった方」。

Sさん(50代半ば・男性)は、就職活動をしながらプログラム参加している。それにより交友関係が広まり、就労意欲が喚起されたが、就労には至っていない。「今の現実の状態を見ていただくために推薦」された。

Nさん(40代・男性)は、特に就労意欲の高さが本人の語りからわかる例として選ばれた。ただし、就労を強く望みながらも、チャンスがあってもその一歩を踏み出せない事実の代表例という位置づけである。

質問は次の5点を用意し、半構造化インタビュー法で行った。①生い立ち、②生活保護を受給するまでの経緯、③現在の生活、④プログラムに参加して(きっかけ、変化等)、⑤プログラムの改善点・要望。Mさんは緊張を和らげるために自立支援プログラム担当者が付き添ったが、あとの二人は筆者が単独で行った。時間は一人60分~90分である。聞き取り後、全文テープおこしをしたトランスクリプトを作成し、分析にのぞんだ。

3 結果

3-1 Mさん(60代前半・女性)

①生い立ち

長崎県で生まれ、父、母、腹違いの姉がいた。学校の出席は、「休むのが嫌い」だったので皆勤に近かったが、「あまり熱心に勉強する性質ではなかった」という。「女は仕事すればよかけんみたいなことを言われ」たこともあり、新聞を読むことはできるが、計算や文章を書くのが苦手だという。彼女を紹介してくれた自立支援相談員によれば、1年間をふりかえって作文を書いてもらったが、「書けない。字をあまり書けんけん、わからん」と「つながりを持って書くのが難しい」と話していたという。

15歳までそこで育った後、近所の知人から神奈川県川崎市で住み込みの牛乳店の仕事を頼まれる。「大将も奥様もものすごくよい方で、同じ長崎の出身だったもので、ものすごく待遇が良かった」。

そこで3年くらい働いた後、美容室をひらいていた姉から店を手伝うよう頼まれて、静岡県に移り住んだ。缶詰会社で働きながら、姉の美容室の手伝いをする生活が25、26歳頃まで続いた。そのまま美容師資格を取ろうとは思わなかった。

私は手先が母に似ればものすごく裁縫なんかできる人だったから。妹の方にそれがでて、あたしは全然ダメ。不器用で。恥ずかしい話、手伝いはできるけど、(美容)学校は行けんみたいな感じで。そこで行ってればまた違った道を歩いていたのかもしれないけど、だからすご

く不器用さがものすごく苦になってましたね。小さい時からお前は何をやらしてもダメだって。ほんとうに…そういう感じですね。

26歳の頃、弟と母が新たに家を買ったので、姉の元を離れて一緒に暮らすようになった。「一時病院に入ったり、いろいろしながら」金属加工関連の会社に就職した。しかし、その会社が数年で倒産してしまう。「遊ぶのが嫌い」な彼女は、その後、大牟田市にあるホテルに住み込みで働くことになった。しかし、そこも五年ほどして辞めてしまう。

なんだったかな。何かあった気がしたけど、何があったんだっけ。思い出せん。何かがあって辞めざるを得なかった。

30代前半、ホテルの仕事を辞めた頃、結婚した。当時、パチンコ屋で寮生活をしながら生活をしていましたが、「主人がパチンコ屋なんかやめろみたいな感じで言われて、そして一緒になった」。結婚前に、すでに子どもは三人いたが、籍を入れていなかったので書類上は「未婚の母」だったという。籍を入れなかった理由を尋ねると次のように答えた。

別に無かったんですが、母さんから怠け癖が付くからってというような話が耳に入ってきたものだから。お母さん本人じゃなくて紹介者がいて、〇〇さんってあんまさんの紹介だったもので。その人が言うてくれだして、一緒になるとあれになるやろう。大変みたいよって聞いたもんだから、いろいろあったんですけど、こんなんです。

②生活保護を受給する経緯

ご主人は、職場で大きなけがをしたり、病気がちで、仕事に「行きはじめると病気がでるような」感じで、「あまり働きがわるかった」。当時、Mさんと子どもたちと一緒に暮らしていたが、Mさんが働いていたが、彼は、生活保護を申請したりしながら生活していた。民生委員のすすめで、ご主人の籍に入り、平成8年、世帯として生活保護を申請した。

受給期間は、「一時、結構長かった。二年くらい、三年、四年くらいかもしれん。よう覚えとらん」。籍を入れ、生活保護を受けて生活した頃、ご主人が飲みすぎで体を壊し、しばらくして亡くなった。

45（歳を上限に募集段階）で切られて、全部。皿洗いとかいろんなの挑戦してみるけど、ダメだったんですよ。なるべく仕事したいって言う気持ちであっちこっち行ったんですけど、しょうがないよって。民生委員さんが（生活保護）を受けたらって。仕事をしたいよって言うけど、その前の主人がケガしたときとかに受けているじゃないですか。また弟とかに援助できませんとか、妹のところの手紙出したり。それが頭にあるもので。

「休むのが嫌」なMさんは、生活保護を「受けたくないって気持ちでずっと仕事を探していた」。しかし、年齢的に厳しい状況にあった。少しでも収入を得たいと自身の信じる宗教の広報新聞配りの仕事なども受け負ったが、生活が成り立つほどにはならない。また、シルバー人材センターに登録を試みたが、逆に60歳以上という年齢制限から断られた。

みかねた民政委員から申請を促されるも、親族に援助ができない旨の確認をすることなどが頭をよぎり、最後まで躊躇した。

あれやった、受けたくなかった本当は。働きたいって言う気持ち一杯だった。今まで働いてきたんだからって。そうしたら「あんたはいつも働きたいって言うね」って言われて。本当は働きたくてたまらんのよね。草むしりでもなんでもいいから行きたいって言う。そんな感じで、シルバーにも申し込んだんです。

③現在の生活

「休むのが嫌」というMさんにとって、「働く」ということは、生活費を得る以上のものであり、彼女の生き様そのものであった。

今でも仕事があれば、ボランティアでもしたいし、なんでも言ってもらえれば結構です。それこそ、お年寄りの家に行って茶碗洗ったりとか、買い物したりとかああいう仕事でもしたいんですけど、「バイクもってる?」「車もってる?」ってみんなから言われる。そんな感じ。

60歳を過ぎた今、かつて入会年齢に達していなかったので断られたシルバー人材センターに申込みに行った。しかし、今度は請け負う仕事なかった。自動車免許は更新切れでだいぶ前に失効してしまった。

60過ぎて申込みいたら、今度は仕事はないって。紹介してくれんって。なんか空回りってみんなから言われた。

現在は、独り暮らしである。独立した子どもたちとは連絡を取っている。人当たりがよく、実直な人柄のMさんは、ご近所好きあいも良好のようである。

みんな、あたしがおらんときが多い、みんなに言われよるみたいやけど、訪ねてもおらんけん。「おるよ」って言って(笑)。新聞配達して、なんかして午前三時から起きてお参りしたりするから、11時くらいまで寝てたりするときもある。だから、おらんときが多いって思われてるときの方が多いいたいで。だけど、みんなよくしてくれます。

④プログラムに参加して

Mさんは、現在、動物園のプログラムに参加している。選らんだ理由について次のように語ってくれた。

説明の案内状が来たとき、どうしたら行けるんやろうかって。そういうあれで思ってた。なんでかつちゅうと、じっと家におってもって感じでしたね。

(略)内から近いのが一番ベストだなんて。それも歩いていけるって言うので、動物園にしたんですけど。なんでかっていうと体を動かすのが好きなんですよ。ずっと家にいたり、ぼーっとするのがきらいな感じで。

実際に行ってみての感想を尋ねたところ、「嬉しくて嬉しくて。必要とされているのが嬉しくて」と満面の笑顔で答えてくれた。他の受け入れ先を追加することも考えたが、交通アクセスの面から断念した。

参加後に何か生活などで変わったことはあるかを尋ねてみたところ「張りが出てきますね」と答えてくれた。動物園のプログラムの主な作業は園内の清掃・美化作業である。曜日ごとに5名程度のグループを組んで作業にあたるが、Mさんは、参加する曜日の「まとめ役みたいな」役割を担っているという。

新しいメンバーで楽しいには楽しいですね。えーって言いながら、そう、あたしがまとめ役位みたいな。そんな風な感じがあるみたいで、そんな風に言われるのよね。(プログラムに参加して)三年になるので、(新しいメンバーに)教えられるところは教えてっていう感じで。(略)だからあたしが休んだとき、みんなでやってよねって言った。

彼女の語りからは、新しいメンバーに仕事を教えることやリーダー的役割への自負が垣間見えた。

ところで、ここにメモとして若干の考察を書き記しておきたい。彼女には独特の語彙の用法がある。それは、「みんな」と「仕事」という二つの使い方である。一読して、「みんな」が言う、「みんな」が思うといった語り口が多いことに気づいた。また、自立支援プログラムの作業を「仕事」という点も興味深い。詳しい考察は、別稿に譲るが、この二つには、彼女が生きる意味世界にアクセスする重要な鍵になっているように思える。

⑤プログラムの改善点・要望

「改善点ってそうでもない。今のままでいいかな」と答えたが、さらに尋ねると、年度

末に中断してしまう現行体制の改善を述べてくれた。予算の関係上、三月にはプログラムが終了してしまう。二週間に1回でもいいので、活動できないかとのことであった。

3-2 Sさん(50代半ば・男性)

①生い立ち&

②生活保護を受給する経緯

Sさんは、柳川市出身、父と母、三人兄弟の真ん中として生まれ育った。義務教育段階は、休むことがなく、「遊ぶことに夢中であまりしませんでした。今になってもう少し勉強していればと思いますけどね」と述べるが、基礎教育レベルの学力に問題はないという。地元の定時制高校に進学するも中退し、船関係の仕事に就いたが三か月で辞めた。

最初は船関係の仕事でした。十二指腸潰瘍だけは持ってたものですから。それでどうしても船だけは慣れなくて、すぐ下船させてもらって地元に移りました。

その後、友人の紹介で鉄鋼関係の仕事に就いた。3年くらい務めて、炭鉱関連に転職した。炭鉱関連事業が閉鎖し、会社を移らざるを得なくなり、30歳半ばでボーリング会社に入社した。しかし、工作中事故にあい、片目をほぼ失明してしまう。労災認定は受けたが、「目をやられたらもう終わり」だという。

会社を退社することになり、「アルバイトみたいなこと」はしていたが、正社員としての仕事に就けなかった。健康診断書の提出を求められたとき、片目がほぼ失明状態であることがネックになったからだという。そうした状況により生活保護受給にいたった。

③現在の生活&

④プログラムに参加しての変化

眠りが浅く、二、三時間で目が覚めてしまう。「年のせいで数時間しか寝れなくて。若いときは何時間でも寝てた」という。

自立支援プログラムに参加するように声をかけられたときは、「やったことないから、やってみようって感じ」で受けた。汗をかくことは気持ちいいという。受け入れ機関の動物園までは徒歩で通っている。参加して、「動物園」やそこで働くスタッフの「すばらしさ」に気づいたという。

プログラム参加後も就職活動は盛んにしている。どのくらい受けたかわからないほどだという。しかし、成果がでない。Sさんは、「ボランティアも大事だけど、仕事」だと考えている。近所づきあいは、「ちょこちょこします」が、あまり深くつきあうとお互いに「かえって気をつかう」と考える。こうした考え方は、Sさんの交友関係の基本にあるようで、プログラム参加者同士の距離感についても同じようなニュアンスが伝わってきた。

⑤プログラムの改善点・要望

Sさんの語りの端々からは、就労への意欲の高さが伺えた。しかし、年齢的にそれが厳しく、本人もそのことに自覚的であり、焦りと諦めが同居した複雑な心境が感じられた。

仕事がないでしょ。就けないでしょ。自分たちがやる気だしたって。△△さん（若くてエンプロイアビリティの高い人の例）くらい力強さなじゃいと就けないですよ。安心できないですもの、不景気でダメです。それくらいじゃないと今はもう。

3-3 Nさん（40代半ば・男性）

①生い立ち&

②生活保護を受給する経緯

出身は大牟田市、中学校卒業後、滋賀県の紡績工場に働きに出る。地元の高校に進学したかったが、中学校三年時に父が倒れ、経済的な理由から家を出て働くことを決意した。姉は大学進学を考えていたが、同様の理由で同じ紡績会社に勤めることになった。

Nさんは、その紡績会社には通信制高校を受けられる制度があり、それを利用して卒業した。同期の男性社員で卒業までできたのはNさん一人だったという。その後、親戚の人が働く大阪の紡績工場に給与が良いので転職した。

大坂で3年くらい働いた頃、父が病になったという知らせを受け、地元大牟田に帰るよう頼まれた。地元で職を見つけた。6年間務めた頃に、人員整理があった。夜勤制の内容だったので体力的にはきつかったので退社することにした。

その後、建設会社で材料を運搬する仕事に就いた。給料を上げてくれるという約束だったが3年経っても変わらなかった。以前大阪で務めていた会社から誘いがあったので、再び大牟田を離れ、大坂に行くことにした。しかし、1年半後、会社が倒産。親戚が住んでいた西成にあるスーパーで十数年勤めるも、そこも倒産してしまう。

そこで、再び大牟田に戻ることにし、期間社員などで生計を立てていた。半年経った頃、体調が悪かったので、病院で診察をすると糖尿病だった。足のしびれや目が少し見えづらい等の症状があるので、生活保護を申請して療養に専念することにした。

③現在の生活

現在、母と二人暮らし。結婚歴はない。

自立支援プログラムの知ったのはチラシがきっかけだった。参加は、職員の働きかけの前にNさん自ら決めたという。「施設の人もあるんだし、わからんことあったら聞かないかと思って」たし、お年寄りと話するのは苦ではなかったの、「不安はなかった」。

仕事をしないで、じーっと居たもので、何かしたかったんですけど、僕、介護施設とか行きたいと思ってても、自分ではどうやって行くのかもわからんし、ヘルパーの資格も持ってないし、なりたいて思っても、何も知らんから。一応、そういうところで経験をした方がいいんじゃないかと思ったんですけど。そこでヘルパーとか免許がとれたらいいんですけど、そういうのが無いんですよ。取れなくて。取れなくて、その免許を取りにいきたいと思ってても、お金がかかるんですよ、7万円とか。お金がないんで、免許がとりにいけない。そういう状態になっています。

プログラム参加の動機は、「本当は仕事にしたかった。つなげたかった」。「ヘルパーくらいならって思った」からだという。(この点に関しては、担当の自立支援相談員は福祉労働を低くみているという判断をしており、生業扶助制度を活用したヘルパー資格取得支援の活用を見合わせている筆者のインタビューで述べていた)。

最初に配置されたのは、デイサービスだった。そこは「すごく面白かった」。しかし、1年半くらい参加したが、目の症状が悪化し

中断した。半年後、再び、参加するようになった。現在の心境を次のように述べる。

けど最近はやっぱりちょっと仕事をやっているみたいになっているから。ちょっと気分的には仕事なのかなって思ってる。どういったらいいんですかね。遊びの部分で楽な部分でいっている部分と責任感があるような感じになってきている。(略)

最近ちょっと、仕事を覚えたいと思ったもので、だから、(受け入れ機関の職員に) 教えてもらっているんですね。

(略) 遊びの部分じゃなくなっているというか。ただ手伝っているだけじゃなくて作業みたいな感じですね。

④プログラム参加後の変化

プログラム参加後に、生活や気持ちの変化があったかを尋ねると、お年寄りに対する接し方やまなざしが変わったという。

ちょっとはありますね。前はお年寄りをみたら、ちょっと優しくなかったと思うんですよ。ちょっと嫌な顔をしてたと思ってるんですよ。バスとかでお年寄りが若い人を注意したら、「あんなにせんでもいいのになって」思ってたんですけど。最近は自分も体が悪くなってきたせいか、(お年寄りとの) 接し方もちょっとは違うと思うんです。

交友関係や近所づきあいは、母は良い方だが、「僕は家に帰ったら家からあんまり出ませんね」。日課は、糖尿病の治療に病院に通っていることくらいだという。プログラムが

ないときは、「病院と家の往復」だという。プログラムには多いときで週4日通っていた。「仕事につなげたい」と思っていたからであった。その結果、朝の介護補助にパートとして来てくれないかとの打診があった。しかし、早朝ではバスの乗り換えがあり、「時間的に無理かな」と思い、また「自転車で通うにはちょっと遠いかな」と考えて断った。(この点に関しては、担当の自立支援相談員は、早起きしてバスを乗り換えていくか、自転車で通おうと思えば行けなくもなかったと考え、そこにNさんの就労意欲の現状が表れていると見ている)。

現在では、就職は、介護系にこだわらずに「今はなんでもいい」と考えている。自立支援プログラムも動物園にも参加してみたいと思っている。

もう一つのプログラムに参加して大きな変化は、体重だった。糖尿病の診断を受けた頃は肥満体だった。食事制限をしても痩せなかったのが、プログラム参加後10キロ体重を減らすことができた。しかし、中断していた間に5キロ増加してしまい、「体を動かさないダメですね」という。

⑤プログラムの改善点・要望

Nさんは、「仕事につながる」ようなプログラムであってほしいと考える。したがって、作業内容も職員に准じた網羅的でもう少し「難しい」ものであってほしいと考える。

ボランティアもそうなんですけど、1回行ったら収入が少しでも貰えたらって思いますね。やりがいが出てくると思うんですよ。1回行ったら1,000円でも貰えたら嬉しいかなって。あと、作業内

容はもう少し難しくてもいいかなって思うんです。あれダメ、これダメとか(略)制約がある。自分ですぐしたいけど、できないという、そういうところがある。(略)自分としては全部を経験したかった。背中流したり、お湯をかけたとか、介護士さんとかヘルパーさんがやるようなことがやりたかったんですけど、ボランティアができることは限られている。仕事という全部こなさないといけないので、全部を教えてもらいたいなっていうのもある。時間が短いなっていうのもある。

具体的な提案としては、「ボランティアでもステップアップ」し、資格や免許が取れるような制度につなげてほしいとのことであった。例えば、半年間通えばヘルパー資格の取得支援をしてもらえるような「特典」や「階段」があるとよいという。そうすれば、「習う方も段々ステップアップになる」。

ボランティアさんというのは、いてもいなくても同じものという語弊がありますけど、あまりたいしたことはさせられないという頭だと思うんですよ。

(略)利用者の人からみたら。ボランティアであろうが、ヘルパーであおうが、介護士であろうがそこで働いている人にしか見えないんですよ。近くにいればいくらボランティアといっても区別がないからいろんなことを言うわけですよ。(略)やはり働いているという見返りじゃないけど、誇りじゃないけど、仕事をしているっていうものが欲しい。